

令和 4 年 5 月 14 日

学校関係者評価委員会 議事録

学校法人 国際共立学園
学校関係者評価委員会
委員長 小林美貴

会議名	学校関係者評価委員会 定例会議
開催日時	令和 4 年 5 月 13 日 18:00~19:00 (1 時間)
場所	新館 8 階 ホール
出席者	【委員】 小林 美貴 (教育機関)、阿部 浩 (教育機関)、阿久津 幸司 (教育機関)、 門脇 一浩 (教育機関)、富岡 啓夫 (業界)、立花 正雄 (業界・卒業生)、 間仁田 厚 (業界・保護者)、堀口 真理(業界) 【教職員】 工藤 佑輝、五十嵐 久乃、池田 昌央、阿見 芳明、境田 三友紀、星野 丈二、古荘 浩司、 高橋 淳実、嶺 雄太、福島 三奈子、原田 昭男
配布資料	自己評価報告書 (事前配布) 令和 4 年度学生便覧、各学科授業計画(シラバス)

学校作成の自己評価報告書に基づき各委員が事前評価を行う。

学校側自己評価と委員による評価点数に顕著な差がある箇所について学校側の補足説明と質疑応答を行った。

基準 1 教育理念・ 目的・人材像	【補足説明】 基準 1-1-4(社会的ニーズを踏まえた将来構想を抱いているか) 【説明者】 工藤 佑輝 【説明内容】 当然のことながら中期的スパンの学校運営構想はあり、それに基づき各年度の事業計画を策定している。そのことについての説明が充分でないことをお詫びする。 例えば、中期的取組みの一つとして外国人美容師の就労解禁とそれに向けた留学生の獲得という課題がある。 このため、昨年度より留学生への広報活動を本格的に展開すべく外国語版の HP・募集要項の作成、日本語学校訪問等を行っている。 また、本年度の話にはなるが、学内にエンロールマネジメント(EM)委員会を設置した。 エンロールマネジメントとは、入学前から在学中、卒業後までを一貫してサポートする総合的な学生支援策のことをいい、学校全体で各個人を学力・就職・生活などの面からサポートすることをとおして退学率の低減を図るものである。 つまり、学校の現下の優先課題は中途退学者の発生防止と考えており、このことに繋がる様々な施策に取り組んでいきたいと考えている。
-------------------------	---

	【評価】 学校関係者評価委員会による評価（平均）は 3.9
基準 2 学校運営	【補足説明】 基準 2-5-1(人事・給与に関する制度を整備しているか) 【説明者】 五十嵐 久乃 【説明内容】 いわゆる目標管理制度をベースとした人事制度をとっている。 評価点数で示された懸念は、教職員が自発的に考え行動しようとする、イニシアティブの育成・発揮に対してこの制度が十分に寄与していないのではないかとということであろうと考える。 ご指摘を受け止め、個々の教職員との対話を通して彼らの要望に真摯に耳を傾け、制度の改善とより良い運用を図っていきたい。 【評価】 学校関係者評価委員会による評価（平均）は 3.9
基準 3 教育活動	【補足説明】 基準 3 全般 【説明者】 嶺 雄太、事務局(原田) 【説明内容】 (1) 今年度入学生から各学科の養成人材像、教育課程編成方針、学期・学年ごとの到達目標等を全て明確に言語化した教育便覧を作成・配布し、授業開始前の宿泊オリエンテーションで説明も行っている。 同様に、全学科・全科目の授業内容についてシラバスを作成し、配布・説明している。 これらの取組みの目的は学生の主体的な学びの形成にある。即ち、学生が自身の到達目標(キャリアプラン)を立て、その実現に向け、授業に加えて自学自習を行うことで学びの内容をより深めることを狙っている。そのためには、「何を・いつ・どこまで」という指標を明確にし、かつ事前に学生に提示することが不可欠と考えている。 昨年度はこのことを実現するため、全教職員による研修を何度も行い、各学科においても議論を通して理解を深めていった。 (2) 基準 3-9-4(授業評価の実施)について自己評価を 3 としたのは、評価自体は行っているが、その結果を授業内容の具体的な改善に繋がられていないと判断したためである。 (3) 基準 3-12-1 と 3-12-2 の自己評価をそれぞれ 3 と 4 としたことに対し、教員は確保できているが指導レベルの向上に問題があると総括しているなら、自己評価点数は逆に 4 と 3 とするのが妥当ではないかという委員のご指摘は全くその通りで、ご指摘に従い自己評価点数を訂正する。 (4) 3-12-2(教職員の資質向上への取り組み)については、学園の運営方針達成に直接的に資することを目的とした教職員研修を毎月行っている。 【評価】 学校関係者評価委員会による評価（平均）は 3.9

基準 4 学修成果	【補足説明】 基準 4-15-1(卒業生の社会的評価を把握しているか) 【説 明 者】 事務局(原田) 【説明内容】 本年 3 月に実施した委員会で説明したとおり、まずは卒業生との繋がり強化が現下の課題であると考えている。 育友会(KBF)会報誌「ひぐらし」復刊を媒介とした卒業生名簿のクリーニングはこの一環であるが、これだけでは卒業生との関係構築という目標に比した成果が上がっているとは言い難い。次に何をすべきかという具体的な目標設定と行動計画の作成というステップに入ったと考える。 【評価】 学校関係者評価委員会による評価（平均）は 3.9
基準 5 学生支援	【補足説明】 基準 5-17-1(退学率の低減)及び 5-18(学生相談) 【説 明 者】 高橋 淳実、事務局(原田) 【説明内容】 (1)基準 3 の説明で授業評価の結果を具体的な改善に繋がられていないことが挙げられていたが、冒頭に校長から説明のあった EM 委員会の使命は、こうしたデータ・指標を分析し、有効な対策の立案、結果の評価と更なる改善策の策定にある。 中途退学の低減においても同じで、種々の指標の収集、分析と評価の実施という行動様式を学校に根付かせることが、その対策実施の第一歩であると考えている。 本年度の話となるが、こうした問題意識をもって取り組んでいきたいと考える。 (2) 学生相談の体制について、本校は 3 年前から「なんでも相談室」というものを設けている。常駐のスクールカウンセラーがいないため、提携関係にある心療内科・精神科クリニックと学生との仲立ち、あるいは学内職員によるカウンセリングを行っている。 (3) 留学生の支援体制について、まず現在留学生の在籍者はゼロである。このことを前提に今後の体制構築について話をすると、学務課スタッフに留学経験のあるスタッフがいる。外国での生活と学びの日々を送った経験者の観点を活かした、あるべき支援体制を構築していく。 また、創立以来 50 年以上を誇る日本語学校が近隣にあるという利点を活かすべく、当該校との関係強化を図っている。 本校単独では十分な対応ができないことでも、近隣の日本語学校との連携を通して、将来の本校留学生の満足度を高められるようにしたい。 【評価】 学校関係者評価委員会による評価（平均）は 3.8
基準 6・7 教育環境 学生の募集と 受け入れ	【評価】 特段の質疑応答もなく、学校関係者評価委員会による評価（平均）はそれぞれ 3.9 と 4.0

基準 8 財務	【補足説明】 基準 8-28-1(学校及び法人運営の中長期的な財務基盤は安定しているか) 【説明者】 五十嵐 久乃 【説明内容】 自己評価に「決算後」と表記したが、現在公認会計士による監査を受けているところである。昨年度同様、資産状況は余裕がある。財務基盤に関してはご安心戴きたい。 また、昨年度比較で在校生がちょうど 100 名増加したという好条件もある。 決算の承認による財務状況の確定後、当該項目の自己評価を 4 としたいと考えている。 【評価】 学校関係者評価委員会による評価（平均）は 4.0
基準 9 法令等の遵守	【評価】 特段の質疑応答もなく、学校関係者評価委員会による評価（平均）は 4.0
基準 10 社会貢献・ 地域貢献	【評価】 特段の質疑応答もなく、学校関係者評価委員会による評価（平均）は 3.6
各委員による 自由発言	小林 美貴 国際理容美容専門学校の広報力、情報を発信する力が低下しているのではないかという懸念がある 阿久津 幸司 自分もそう思う。 近年高校の教員、生徒あるいは保護者の情報収集にかける熱意が落ちてきているように思う。そうした人（消費者）が自覚していないニーズを具体的な形で提示する、それが広報活動(マーケティング)に必要なことと考えている。例えばこの学校の在籍者全員国家試験合格など、まさに進路検討中の高校生のニーズを的確に表すニュースである。にもかかわらず、十分な情報提供がなされているとは言い難いように思われる。 門脇 一浩 自分が在籍していたときの高校でいえば、自分が相談しやすい経路（進路指導あるいは担任）から進路情報を収集するというのが高校生の一般的な行動形態のように思われる。 そうだとすると、情報供給源である高校教員の選択肢にこの学校が入っていないといけない。 阿部 浩 自分と志を同じくする教員の仲間たちは、自主的に専門学校との対話を深めることを通して、進路指導担当者として生徒に正しい情報を伝えようと努めてきた。しかしながら、そうした熱意を持った進路指導主事が減ってきたと思う。 そうであるならば、この学校の高校訪問担当者が自校のことを誠心誠意伝える努力をして戴くしかない。手間がかかることは承知しているが、ぜひその思いをもって高校教員と対話を深めて戴きたい。

	富岡 啓夫 この会議は教職員と業界関係者とが接する機会を持つ場でもある。会議に先立つ挨拶に始まり、ときには雑談も交えた業界情報の収集など、教職員も評価委員と積極的なコミュニケーションをとるよう心掛けて戴きたい。 また、この学校だけに求めることではないが、学校中退者の救済措置を考えて戴きたい。高校であれば全日制中退者には通信制なり単位制高校といった道がある。専門学校でいえば、研究科あるいは休学といった手段もあろう。 一度は美容の道を志した人たちがなすすべもなく退場させられる状況を変えられないものだろうか。
次回開催予定	令和5年2月10日(金) 18:00～